土佐日記の自照性について

―亡兒を哀傷する述懷を中心に―

姜　泰　國*

目　次

Ⅰ. 序　論
Ⅱ. 本　論
1. 主題としての自己反照
2. 十月二十七日
3. 一月十一日
4. 二月四日
5. 二月九日
6. 二月六日
Ⅲ. 結　論

Ⅰ. 序　論

土佐日記の主題はなんであるか、を考える場合、①歌論展開、②社會諷刺、③自己反照の三つを取り擧げることができるのである。

つまり、土佐日記は、上に擧げた三つの主題を軸としており、また、構想、手法、文體表現、効果、意識のすべてが、この三つの主題に奉仕するものとして、お互いに力をあわせていると言えるのである。　こうした構成が示めしているように、土佐日記は、非常に複雜な多面的性格を持っていると言えるのであるが、その多面性のために、後續の日本の文學の歴史に、さまざまな様式の文學を生み出す源となることができたのである。

それにまた、萩谷朴氏の「自照的主題」[1] の點からも言える價値性、つまり、土佐日記は實錄性を著しく減殺することによつて、日記の埒外にとび出し、自照性を大きく持ち込むことによって文學に昇華した點においても、日本における最初の「日記文學」として、不朽の生命を持つことにな

1）萩谷朴「土佐日記全注釋」角川書店，昭和57，p.481.

* 人文大學　專任講師

っており、また、貫之自身の抱負もそこにあったものと考えられるのである。 そして、この作品において、日記ということは、單なる形態に過ぎず、作品の主題にはなれなく、他の歌論的主題や諷刺的主題とともに、その自照的主題などもあわせて、はじめて、この作品に、文學としての不朽の價値がこめていると言えるのである。

ここで目をすこしそらして、日本の日記文學の特質を考えてみると、それらは、單なる體驗的な記錄ではないことが分るのである。 これら日記文學の世界をながめて見ると、その中に、事實的記錄からの脫却が內包されていて、日記文學が事實を越えて形造られていることが分るのである。

一人の人間の實人生に卽し、それに密着しながら、その人生の內的な構造をより純粹に形象化し、その人生の眞實の意味をおのずから明らかにしていくのである。

それは、まさに內的な人生の創造にほかならず、その創造的營爲の中にはじめて、實人生との自由で純粹な關係がなりたつのである。

こういうものこそが、「古代日記文學の特質であり、魂の救濟でありえた」と、木林正中[2]も言明しているのである。

近代の日記文學の作者たちが、實人生との間に結ばれた自由でありながら自主的な關係とか、そしてそれにしたがった自己表現の方法などを、古代の日記文學の作者たちは客觀的に與えられていないのである。 しかし、かれらもまた時代的條件のもとで、人間らしく人生を生き、味わおうとしたことは當然である。 だからむしろ、そうした人生の表現方法それを成り立たせる精神的よりどころのない空しさが、かれらをして全身を日記文學の創造へ投入させないではいられなかったと語えるのである。

そこに平安時代において最も個體的で、特有な日記文學が、近代のそれとは異なる深刻な方法において、やはり心の內奧を表白し、自己と對話し、經驗を選別しているのである。

これらの平安朝の日記文學の發生と展開について、岡一男は「この時代の假名散文文學の 成立と展開とも重なり、女流文學の形成を探究するうえに不可欠の問題である」[3] と指適しながら、女流文學の發生と展開が假名文學の發達を伴いつつ、しだいに女流作者たちの心情を吐露する具となった過程が女流日記の成立への道程である、したがって、「土佐日記」の作者貫之も、 冒頭に女性假託をもって執筆することで當時の文學の流れに從いつつ自己の文學的意圖を全うできたのである。と氏みづからの問いに答えているのである。

これらから察すると、日記文學の發生と成立、さらに假名散文の定着における具體的な樣相は先驅的な土佐日記と眞の女流散文文學としての「蜻蛉日記」の形成にあるとも言えるのである。

もっと、土佐日記の「文學史上の位置」について言えば、從來の漢文體の日記に對し、 假名文の日記文學を創造し、それまでの歌が主で、文は縱的であった歌物語から脫皮して、散文本位の寫實性のある人間像を描いている。 特に心理分析や描寫は、それまでにないものである。また假名散

2) 木村正中「日記文學の特質」(日本文學 VOL 32) 日本文學協會編集刊行, 1983年5月, p.6.

3) 岡一男編「日記文學概說」(平安朝文學事典) 東京堂, 昭和56年, p.255.

文による人間の全體性と生活描寫、心情表現を可能にしている點と、宮崎莊平の「女流日記文への文學史的から自己觀照を主軸として私的自己を再構成する文學的手法達成[4]させていると言う點をも合わせて、以後の日記文學の先驅的意義は大きいと言えるのである。

筆者は、「どうして女性假託にしたか」[5]で紀貫之の孤獨な斗い、だがひねくれもせず、柔軟にしてかつ大胆な氣構えで、かつて公事記錄的な日記の性格を打破し、それを昇華させ、それを假名書きによる自己觀照的な內容を持つ、文學的日記の道しるべを示した、と論じたが、本稿の序頭にも擧げたが、本稿では、その內容に入っていき、主題的な面をうかがうことを目的としている。

土佐日記は、形式的には任國を出てからの五十五日間の日付をもつた旅日記の體裁を取っている、だから、承平四年12月21日より、翌五年2月16日までの歸京の日日を暦によって書き、いくつかの對照法的手法を驅使し、男と女、漢詩と和歌、生と死、風景における色彩などによって構成されている。その創作したのは、貫之が承平五年、歸京して亡兒の悲しみ、不如意の前途など無常の世を機智と諧謔とペーソスを交錯させて旅日記として記したものである。

內容は、歸京するまでの海路を中心として一日の記事も性略しない日次の記であり、冒頭には、自己を女性の立場に假託して假名文で記し、出發時における送迎別離、同船の人々の言動、人情の厚薄、自然の景觀、風波や海賊などの心痛と恐怖、京に憧れる心などを述べ、その底邊には、京に生まれて異鄕で失った娘に對する悲哀がこめられていると言えるのである。

本稿では、こういう複雜な多面的性格をもつ、この作品から先づ、主題をとらえ、その一つである自己反照的な主題を中心に考察するつもりである。

「土佐日記研究史通觀」[6]によると、土佐日記という作品をどう促えるか、すなわち作品論的研究は、特にちかごろ、活發な展開をみせ、その第一に擧げられろものが、荻谷朴の說であるとし、主題は表層的功利的には、第一歌論、第二諷刺、第三自照の順にウエイトが置かれているが、內實的、純文學的には、第一自照、第二諷刺、第三歌論と、全く反對の順にウエイトが置かれていると說明している。だが、この自己反照的主題をささえているものはなにか、と言えば、それは「亡兒への哀傷」と見て、この點に重點を置いて論述するつもりである。

この點において、臼田甚五郎は「本日記の主題である亡兒への悲情」[7]も、女性の立場から思いやりと思えば、くり返される記述も、やわらかにしみとおってくると述べているところからも、自照的主題と亡娘の哀傷を同一視しているのがうかがえるのである。

4）宮崎莊平「女流日記文學の初發としての土佐日記」(都大論究10號) 昭和47.

5）姜泰國「土佐日記一考察」濟州大學校論文集 第18輯, 1986年.

6）秋山虔外3人"土佐日記研究史通觀"「平安日記」增補國語國文學研究史大成5, 三省堂, 昭和53, p.583.

7）臼田甚五郎,「土佐日記」(日本古典文學10.) 王朝日記, 角川書店, 昭和56, p.21.

松原輝義も「秋成[8]や景樹[9]以來多くの評家がこぞつて土佐日記の主題の第一に數える亡 兒哀傷の述懷記事に係わって、その內なる相 貌を顯にして來るのである」と述べている。

また、同じようなことを、小宮豊隆も「土佐日記の內容が亡兒に對する悲嘆を中樞として廻轉しているものである事は既に、香川景樹によっても道破されている」[10]といいながら、亡兒に對する追懷が、この日記の內容の中樞を形づくっているものであることは、疑わるべくもない、と言明しているのである。

また、鈴木知太郎も、「土佐で失った娘の追憶の心を中軸としたために、作品には自己反照の色彩が强く」[11]といい、心境小說的な面が新しく拓けて來たことが從來の「日記」の意義、內容、特質などに大きな變革、展開が試みられて、公的なものから私的なものへ、模寫的なものから文藝的、創作的なものへ移行して、その內實に自照的要素や近代性を道入させたしまた、後の女流文藝のみならず、新日本文藝の行くべき道をも開拓したことなどから、文藝史的意義が大きいとほめながら、「亡兒に關する記述が首尾はもちろん隨所に見え、その追慕、悲歎の情は全篇を貫いて、その底流をなしている」[12]と斷言している。

筆者は、前にも述べたように、また諸氏のご意見に同意しながら、「土佐日記」における自照的主題をささえているものを"亡き娘の哀傷"に主眼を置き、その關わりを日記に現われている內容を中心に、その日の個條を取り擧げ、その內容を吟味し、さらに檢討しながら、そこからにじみ出る作者の自己反照的なものを考察し、またその主題と亡娘の哀傷はどうかわっているかをも考察するつもりである。

Ⅱ. 本　　論

1. 主題としての自己反照

主題としての自己反照と亡兒追慕とはどう關係づけられるかと問われれば、それは、

8) 上田秋成：(1734～1809, 享保19～文化6) 江戶中期の國學者, 歌人, 讀本作者, 古典や國語の研究にすぐれた業績を示し古語の音韻などに關して, しばしば本居宣長と論爭している. 歌人としても自由な用語と格調で, 淸新で個性的な歌を詠み, その鬼才を發揮した. 著書は小說に「雨月物語」など, 隨筆に「胆大小心錄」など, 研究書に「古今集打聽」など多く著わしている.

9) 香川景樹：(1768～1843, 明和5～天保14), 江戶後期の歌人, 歌學者, 彼は歌學の基礎として, 古典なり先人の歌論なりの研究を行なつて, すぐれた業績をのこした. また桂園派を起し, 京都歌壇の中心となっていた. 歌は眞心の感動を, 理義や技巧をはなれてそのまま表現する調べであるとし, 用語も實情實景にふさわしい現代語を用いることを主張した. 著書は「古今集正義」「土佐日記創見」などがある.

10) 小宮豊隆「土佐日記の研究」の「平安日記」前揭書, p.70.

11) 鈴木知太郎外三人校注「土佐日記外三篇」(日本古典文學大系) 岩波書店, 1981年, p.15.

12) 上揭書, p.10.

亡兒追慕の情は、たしかに「土佐日記」の第一モチーフとも見えて、日記全篇の基調となっているために、作品には自己觀照の色彩が強くにじみ出ている。

宮崎莊平氏は、「その自己反照の中心は、ほかならぬ亡兒哀傷の述懐である」[13]、と断言しており、さらに「土佐日記」は、冒頭における女性假託のこと、舟旅途次における不安焦燥、無聊の思い、底流となっている亡兒への盡きぬ哀傷の情などが、特徴的要素であるわけだが、そのうちとりわけ、亡兒哀傷の念の表出は、古來作者の心情表出における中心的なものとして讀まれてきた。と述べてあり、さらに、戰後における研究面の推進をうながし、あわせて一般の作品享受を主導してきた代表的と言ってよい書物においても、このことは強調的に説かれていると評價している。

老齢の貫之に幼い女兒があり、その女兒を土佐任中に亡くしたという自體が虚構ではあるまいか。と秋山虔[14]氏によって提出されたのに端を發して、獨自の紀貫之論を展用している長谷川政春氏は、この問題について檢討を加えて、次のように結論づけている。

> 土佐日記の一つのモチーフでありその世界に底流する悲しみの諧調であった「幼女の死」は、作者へ卓越した虚構というレトリックであった。[15]

と、つまり亡兒哀傷の念は、貫之が土佐にあって體驗しなければならなかった流人意識庇護者兼輔をはじめとする他者の死との解逅、自己の死の豫感などの昇華された内的世界の具現であったと説いているのである。また、富士谷御枝氏は「亡兒のなげきをかへすかへす書つつけられたる」といい、「京師より擾へゆきし嬰兒の任國にて死せしを、こたひふり捨かへるたいたくかなしむよりなり」[16]と、上田秋成の「土佐日記解」[17]の一節を引用しながら、土佐日記の中軸について、根據づけしている。

筆者は"どうして女性假託にした」かを取りよげて論述したことがあるが、そこでの結論として、土佐日記の冒頭における女性假託の宣言は、本來女性專用のものであるところの假名文字の使用許可を求めるための卑屈な弁明ではなく、この作品を外面的な事實のみを容觀的に記錄しとどめるための日記ではなく、内面的な自己の心情を告白する日記文學として創作するためには、當然必要な自己韜晦の擬手段であったと述べたことがある。

これらの意見をまとめて、明確に解明している萩谷朴氏によれば、

> 心情告白という大胆な新しい冒險を試みるためには、まず作者自身の人格を職化し、三人稱を用いて自己を解放し、思うところを心安く吐き出さねばならなかったのである。いわば、物語的な日記を人間的

13）宮崎莊平「土佐日記の現在」「國文學、解釋と鑑賞」（2月號），至文堂，1979，p.162.
14）秋山虔「古代における日記文學の展開」のち「王朝女流文學の世界」の「日本文學論」として出している．至文堂，國文學12月號，昭和40年
15）長谷川政春"紀貫之論(五) ― 土佐日記へのアプローチ―"「古典評論」（第五號）昭和44年
16）富士谷御枝；"土佐日記燈"「平安日記」前掲書，p.45.
17）上田秋成；"土佐日記解" 上掲書，p.35.

な日記文學の世界へひき上げた貫之の功積こそ不朽の輝きを持つものである。[18]

と斷言しながら、さらに、人の子の親として、亡兒に對する追慕哀傷の情を語るということは、最も私的な感情の深部に觸れることであるから、日記を脫却して、日記文學に昇率したとはいえ、やはり日記の持つ公的意識に幾分かは牽制されて、自己反照の叙述の回數が自ずとすくなくなるのは當然であるが、そのすくない度數に反比例して、土佐日記における亡兒哀傷の文章は、極めて切實なものがあるのである。 作品全體の物語化、その場その場の戲曲的な構成という方針によって、亡兒への切切たる哀戀の情は、匿名の夫妻の口をかりて、折にふれ、時につけて綿々と語られることとなっているが、その夫妻の人格が、時には、前國司の人格と重なり、舟君と重なり、また、作者に假託したところの女性自身と一致するなど、甚だ不統一な點があり、かつ、貫之自身の年齡からして、果たしてそのような幼兒を儲けられたかどうかの確率も低いものであるから、京で儲けていた女兒を土佐で離任間際に失つたという作品の世界での設定すらが、あるいは虛構であるならば、この作品の表層的な歌論的主題と中層的な諷刺的な主題の他に、自照的な主題を最も深層にひそませて、わさわざ日記文學という新樣式を創始するまでの必然性は認められないし亡兒哀傷に關する個々の文章に表明された心情の切實さや微妙さは、到底あらぬ作りごとは思われないほどのものがある。 と言い、はなはだ、長いようだけれど、大事なところなので、もうしばらく、氏の言うところを追ってみようと思う、氏はさらに、作品の世界における心情告白者の人格が混亂しているのも、むしろ、千々に思い亂れる感情の振幅の大きさが演出家貫之から冷靜さを失わせた結果であるとさえ思われるのである。 亡兒哀傷に關する自照的要素を含む場面の中でも、殊に、十二月廿七日の條における「あるもの」の歌一首は、愛兒を喪った親ならば、誰しもが經驗する感情を確實にとらえて万人に共感を愬える名歌である。 また二月四日條においては、忘れ兒を媒體として、亡き兒を思う切なさに耐えかねて、あるいは、忘れ具を拾つて忘れたいと思い、あるいは、その思い出だけが亡き兒とわが身をつなぐ絆であるから忘れてはならないという、內心の矛循を愬え、その愚痴をわらうであろうかも知らない第三者に對してさえあらかじめの弁解を試み、さらに、五日の條にいたって、忘れたいというのも、思い出を新たにしようとする戀慕の情の裏返しに過ぎないと、自らの心理分析を試みるなど、實に錦密周到な內面描寫がなされていると氏は述べている。

貫之の、その押え難き情の言葉に出てあらわな個條を取り上げて、內容を吟味しながらその主題である自己觀照的な面をさぐってみようと思う。

2. 十二月二十七日[19]

18) 萩谷朴：前揭書, p.485.

19) 鈴木和太郎外三人校注；前揭書, p.29.
これより, この本を底本にして, 原文を引用する, 以後の日次の個條の注のページは全べてこの底本のものである.

おほつよりうらどをさしてこぎいづ。 かくあるうちに、京にてうまれたりしをんなご、 くににてにはかにうせしかば、このごろのいでたちいそぎをみれど、 なにごともいはず、京へかへるに、をんなごのなきのみぞかなしびこふる。 あるひとびともえたへず。 このあひだに、 あるひとのかきていだせるうた、

みやこへとおもふをもののかなしきはかへらぬひとのあればなりけり。 また、あるときには、

あるものとわすれつつなほなきひとをいづらととふぞかなしかりける…… (以下省略)

京で生まれていた女の子が、この任地で急に亡くなってしまったものだから、最近の旅立ちのせわしさを見ていながら、一言も口をきかない、京へ歸るのに女の子のいないことばかり、戀心悲しんでいる、居女わせる人たちも氣の毒でたまらない、そこで誰かが書いて見せた歌は“都へ歸るそのことは、思うも嬉しいはずなのに、むやみに悲しくてならないのは、生きて一諸に歸れない、いとしあの子があればこそ”またある時には、“生きているものだとばかり、 つい忘れてはいるものやはりこの世に亡き人を、おや、あの子はどこへと人にたずねては、はっと氣のつくそのことが、一層悲しことでした。 と、だいたいこういう內容である。

「土佐日記」全面にみなぎる悲愁の色、それは、やはり、亡き娘への盡きない、 ほとんど愚痴と言いたいほどの追慕の情であるが、それがこの段に初めて現われてきた。 前日までは、出發を前にして人の出入も多く、最後の公的なつきあいに忙殺されていたのだが、身內の者だけの靜かさに還つて、船出してみるとひとしお思い出されてきたのである。

おそらく亡くなった子は幼女だったと思われる、とすれば、よほど老年になってからの子で、あるいは末子だったかも知らないが、そう思ってみると愚痴にすぎるほどの貫之の歎きも同情がもてるものである。

この日の個條について、萩谷朴氏は、

貫之が老境に得た幼女を、土佐在國中に喪ったということは、恐らく事實であろう。[20]

と、述べながらさらに、虛構が多くて、どこまで眞實で、どこからがつくり話か、うっかり信用のできない土佐日記ではあるが、亡兒を偲ぶ和歌には純粹な親心というものが、ありのままに吐き出されているし、またそのためにこそ貫之は、自己反照という第三の主題を說定し、その主題であるがゆえに、土佐日記は、單はる記錄としての日記ではなく、文學としての次元にもで高まり得たのであるから、 やはり、 眞實の裏づけなくしては、あり得なかったことと思われると述べている。

20) 萩谷朴；前掲書，p.102.

貫之の任果ての年承平四年(934年)には女子の年齢は數え年で五六才から少くとも三集の言う七・八才というのは先ず妥當である。[21]

と言いながら、さらに、日記の歌「あるものとうせしことを…(省略)」を上げて、土佐日記の全書は、その死の事實の推量に委ねた省筆を復元してみせているのであるが、「いづら」というていの口頭語に顯な表現の、その平明さのゆえに、その最も重要な死の事實を省略した歌い口が、その事實の、心には容易に納まらぬ親の悲しみの切實を却ってリアルに詠い得ているし、またこの古今集的な巧緻を拒み虛節を癖したリアルな歌柄の存在こそは、亡兒追慕の記事を虛構とする考えを強くしりぞける。そして愛兒の死は、貫之にとつての悲しみてもなおあまりある體驗的事實であったことを、それは例よりも證する。その深い悲しみの事實を貫之はその歌の全身的は悲泣表出を内に包みながらも、できる限り客觀的に見据え、記述してゆうと努めていると述べている。

上記の兩氏の「虛構だ」「いや」は、ともかく、自己反照の文學としての土佐日記において、亡兒を追憶する親の心情をより一層切實に表現し得たのは、松原氏も引用している「あるものを…」の詩一首であろう。

亡兒の印象は、今なお鮮明であって、むしろ死亡の事實を忘れているほどである、しかも、この出發前の忙しい時にあって、その子の姿が見當らない、この死別の悲しみは、あらたなる涙と共に、胸中を締めつける。

これは近親の者を喪った人間の誰しもが經驗するところである、ごく普遍的な人間感情であって、しかも痛切きわまりない印象、それをなんの技巧もほどかさないで、平凡なことばであますところなく表現し、重要なポイントを省略することによって、かえて讀者自身の想像による一層身近かな共感をよぶことに成功している。たしかにこの歌は貫之生涯の秀歌の一つに數えらるべきであろうが、こうしたリアルな作品が詠まれるとこるにも、愛兒死亡という體驗的事實を立證する根據が見出だされるように思う。これがフィクションであろうとどうであろうと、これらの和歌の心情表白のたしかさによって自照文學としての土佐日記の評價が確定するわけである。

3. 一月十一日[22]

あかつきにふねをいだして、むろつをおふ。(中略)。いまし、はねといふところにきぬ。わかきわらは、このところのなをききて、「はねといふところは、とりのはねのやうにやある。」といふ。まだをさなきわらはのことなれば、ひとびとわらふときに、ありけるをんなわらはなん、このうたを、よめる。

まことに名を聞くところはねならはとぶがごとくみやこへもがな。

21) 松原輝美;"土佐日記私考(下)"「文學」(VOL 49), 岩波書店, 1981. p.94.

22) 底本の p.37.

これは、その時ちようど、羽根というところに來た、幼い子共が、この土地の名を聞いて、"羽根ってところは、鳥の羽根みたいたなっているの」という、また小さな子の言うことだから、みんなおもしろがって笑う、その時、例の女の子が、この歌をよんだ、"本當に、その名の通り、ここが鳥の羽根なら、私たちもそれに乘ってとぶように都へ歸りたいものね"という內容である。

「はね」という地名をきいて、「鳥の羽根のようなのかしら」と問った子供のあどけないことばは、一面では「とぶがごとくに都へもがな」と都戀しい情をかきたて、他方では、そのあどけなさのうちに、亡き娘をふと感じさせて、やるせない悲哀の情をそそる。

その間の場面の展開のさせかたは、短かい文章でありながら、きわめて鮮かである。いつの時代にも、故鄉へ歸る都には、それも數年の間、はなれていた者には、とぶがごとくに、ということばも、實感がこもってくるのである。

臼田甚五郎氏は、この個條について、

> 女童の歌は、都への歸心を率直端的に述べている。[23]

と、言いながら、さらに、いや味をさせないのは、子供らしく素直に詠んでいるからであり、興がった童から亡き愛娘に筆を轉ずるあたり變幻自在であると述べている。

このように子供たちに重要な役割をふりあてていること自體が虛構ではないにしても、それは年少讀者の共感をひき出して、自己反照の世界に誘導する戲曲的な演出効果を持つものであり、感情的と理性的との差こそあれ兩親の子供に對して抱く愛情というものが、いかにも切實であるかということを、それとなく年少讀者に知らそうとする、道德教育的な、二次効果までをも豫期してのことであったかも知れないのである。

こういった、土佐日記における文學的エネルギーのもっとも純粹な燃燒ともいうべき亡兒の追憶する自己返照のテーマが、むしろ、父母の恩愛の情を說くものとして、和歌教育の對象であるところの年少讀者に對する倫理教育の効果を荷わせられているといえる。

4．二月四日[24]

かぢとり、「けふ、かぜくものけしきはなだあし。」といひて、ふねいださずなりぬ。しかれども、ひねもすになみかぜたたず。　このかぢとりはひもえはからぬかたいなりけり。　このとまりのはまには、くさぐさのうるわしきかひ、いしなどおほかり、かかれば、ただむかのひとをのみこひつつ、ふねなるひとのよめる。

よするなみよせなむわがこふるひとわすれがひおりてひろはん、といへれば、あるひとのたへずして、ふねの心やりによめる。

23）臼田甚五郎；前揭書，p.60.
24）底本；p.49.

わすれがひひろひしもせじしらたまをこふるをだにもかたみとおもはん、となん言へる。をんなごのためには、おやをさなくなりぬべし。「たまならずもありけんを。」とひといはんや、されども「しじこ、かほよかりき。」といふもあり。なほおなじところにひをふることをなげきて、あるをんなのよめるうた。てをひでてささもしらぬいづみにぞくむとはなしにひごろへにける。

かじとりの豫測、判斷は、技術者の言葉として貫之達のようなしろうとには至上的である。ところがせっかくのよい天氣である一日を、かじとりの言葉にしたがったばかりに、棒にふってしまったのである。怒るのももっともかと思われる。このあたりには、海賊などの危險もなく、緊張もとけて、もう一日も早く都へという思いだけで、こらえ性のなくなっているのであろう。このかじとりは、貫之にはあまり好意的には見られていない。

それが、本職の舟乘りとしての判斷に誤りがあったというのだから、たまらないのである。眞向から「かたい」とののしられてしまったのである。「かたい」というのは一種の轉用で罵言ないしはさげすみのことばとしてこの時代に、用いられていたらしい。「昔の人」というのは、土佐の國でなくした娘のことである。貫之老夫妻の心情はそぞろにあわれである。「舟なる人」ということばの感じは、どうも夫人らしく思われる。歌は貫之の夫人の歌という趣きにしたのである。忘れ具を捨おうというのも親の心であれは、いや、忘れまい、この自分の、ある娘をしたう氣持を、せめてあの娘の形見として抱きしめていたい、というのも親心である。そうした愚痴もこぼさないではいられないやるせない思い、意志もはりもうしなった悲しみ、それを「おやおさくなりぬべし」と言ったのである。眞情の人を打つ文章である。「たまならずもありけむをと人言はんや、されども死しこかおよかりきといふやうもあり。」というのも、まったく飾りけというもののない眞率のことばである。ただちに入ってよむ人の肺腑を衝く趣きがあるのである。

小西甚一氏は、[25]この個條を評して、今の子供たちがおはじきや千代純を集めて樂しむように、このころの少女たちは、美しい小石や貝がらを集めてよろこんでいたのである。と言い、さらに、歌集や物語にたびたび見える「いしなどり」の遊びがあり、こういう美しい小さいものを愛するのは、昔も今も變りない子供心であるという。また、砂浜にうちよせられた貝や石から亡き娘の思い出へと展開していく一般は、そのかげに白髮の老巨匠の姿を思うと、いっそう悲痛である、ひきつづいて現われる二首の歌は、別人の作のようにしてはあるが、追憶の情に耐えかねて、「人忘れ貝下りて捨はむ」と悶えるのも人情なら、現在の苦痛と悲歎とのみが、かえつて、そ悲痛さにすがろうとするのもまた人情である、のの感情が當時、貫之の胸中に渦卷いていたのであるう、そこに既成の表現意識におさまつてはいられない人間性が、波うつように息づいていると述べている。

十二月二十七日條の大津出帆に際しての亡兒への思い出、正月十一日條の羽根岬通過に際しての哀傷に續いて、亡兒追慕の情を自ら表明する自己反照的テーマに關することが、第三の山場であり、かつもっとも深刻な文章となっているのである。

25) 小西甚一;「土佐日記評解」有精堂, 昭和53, p.160.

老匠の貫之は、舷にぼんやりともたれて、浜邊に遊んでいる女子供たちの姿を眺めている。亡き娘のことが自然と思い出された。 今あの娘が、ここにおれば、あの娘たちといつしようにに貝を捨ったりして、はしやぎながら深して遊んでいるだろうにと思う心に、ひとしお悲しみが、 じつと湧き上がつてくるであろう。 この日の條は、そのしみじみとした感傷に、私たち讀むものは胸がじんとくるのである。 おそらく、この日記全篇を通じても、最も印象の深い個條の一つとなっていると言えるのである。

ここに表われている二首の問答の歌には、ある時は忘れ貝を捨って追憶の重壓から逃れたいという氣持ちと、ある時は、またその悲しみをすらも、亡き娘と自分とをつなぐ唯一の絆として殘しておきたいという、人の子の親の煩惱をありのままに寫し出しているのであるが、これはおたがいにあい矛循する二つの感情がよみとられるのである。

「忘れてしまいたい」「いや忘れたくない」という、貫之の一個人の心中に渦巻き對立する二つの感情の、どうしても整理することのできなかった矛循を、ありのままに二首の和歌に託して表明し、その矛循に對して、先制的な自衛として、人の子の親の愚かさを反省し、自嘲したように、その和歌の用語一つ一つに對しても、豫想されるところの第三者の批判に對して、自己弁護を用意してあるのである。 これらの感情の動搖が、すべてありのままに、心理の移動變化の順をおって、報告されているところに、土佐日記の自己反照の文學としての資格を完全なものとして立證し、また、再三言うであろう意義として、日本の日記文學という新しい様式の創始を歴史的に意義づけることができると斷言できるのである。

しばらく、木村正中氏[26]氏の言うところを追って、この個條は終わりにしようと思う。 貫之は美しい貝や石を見て、亡き娘を偲ぶのだが、堪えがたい戀慕の情をいっ のこと忘れ具を捨って忘れたいという「よするなみ」のうたと、あの娘がいないのなら、せめてあの娘への戀情だけでもなくしたくないから、忘れ貝を捨うのはやめにしようという「忘れ貝」の歌とはもちろん別の主格 に分けてともに、貫之の心を詠んでいるのであって、まったく逆の心情を訴えているこの二首は、どちらもいつわりのない眞實であり、むしろその矛循が亡さ娘の追慕の情の内面の深刻さ如實に表わしていると木村氏は評しながら、さらに、この個條の後半にも、意想を反轉させながら、親心を人間的眞實として、書き綴っていっていると言明している。 また、氏は、貫之の心境については、貫之の心は、都へ、都へで一杯である。 貫之はよろこびながら悲しみ、進みながら退き、重い氣持ちと輕い氣持ちと、明るい心と暗い心とが、不思議に交錯する中で、この旅を續けなければならなつた。 と述べている。

5．二月九日[27]

こころもとなさに、あけぬから、ふねをひきっつのぼれども、かはのみづなければ、いざりにのみぞい

26）木林正中；“土佐日記の主題は何か”「國文學」至文堂，1979.2. p.103.

27）底本；p.54.

ざる。……。かくてふねひきのぼるに、なきさの院というところをみつつゆく。 その院、むかしをおもひやりてみれば、おもしろかりけるところなり。……。、いま、けふあるひと、ところにたるうたよめり。……。といひつつぞ、みやこのちかづくをよろこびつつのぼる。かくのぼるひとびとのなかに、京よりくだりしときに、みなひと、子どもなかりき、いたれりしくにてぞ、子うめるものどもありあへる。ひとみな、ふねのとまるところに、こをいだきつつおりのりす、これをみて、むかしのこのはは、かなしきにたへずして、

なかりしもありつつかえるひとのこをありつつかえるひとのこをといひてぞなきける。 ちちもこれをききて、いかあらん。 かうやうのこともうたも、このむとてあるにもあらざるべし。もろこしもここも、おもふことにたへぬときのわざとか。 こよひ、うどのといふところにとまる。

京に近づくにつれて、またしても思い出されるのは、京で生まれ、任國で亡くした幼い娘のことである。 土佐の國で、はじめて子供をもうけた人々は、子供を抱いてそれぞれ舟をおりのりするのを見るにつけても、親の心は、かきむしられるように痛むのである。 忘れようとしても、忘れられないのであるが、幸わせそうに、一行の中の親子の姿を見れば、悲しみにほとんど堪えがたい思いなのである。

この個條は「みやこの近づくをよろこびつつのぼる」にみられるように、一行も次第に笑いをとりもどし、周圍はいよいよはなやいでにぎやかになってきたのである。 そのさ中にあって、貫之の老夫妻は、ひっそりと、亡き娘のことを思いつづけているのである。 妻の歌と、その泣くのを聞いて、貫之の思いもつらかつたであろう。 「ちちもこれをききて、いかがあらん」は、涙をのみこんだ悲痛の表現である。 貫之の晩年の、人間的にも練れきつた人生體驗と、枯れてしかもはりと强さを失なわない見事な措辭とが、渾然としてこの珠玉の文章をなしている個條と言えるであろう。

もう一つ、「渚の離宮」がでているが、この離宮は、昔を想つてみる貫之には、いかにも、因緣の深いところであり、それを、挿入するところにも、趣の深げなところである。

つまり、この渚の院を眺めながらというところは、表面的には、惟喬親王と業平中將とを名指してはいるものの、より强く、紀氏家の歷史に對する懷舊の情をも働いている思えるのである。 この紀氏家の歷史については、拙筆でくわしく述べあ[28]るので、本稿では言及しないことにする。

この個條の終わりごろに出てくる、「なかりしも……。」歌は、續む者の心を痛くさせてあまりある悲しみがにじみでているのである。 都が近づくのを喜び、喜びながらさかのぼってゆく。こうして上京する人々の中に、京から下向した時には誰もみな子供はなかった、 だが赴任先で子を生んでいる者たちがいあわせている。 その人たちがみな船のとまるところではきまって、めいめいに子を抱きかかえて降りたり乘つたりする、これをみて、死んだ娘の母親は、悲しみを抑えきれなくなり、「前に無かつたものでさえ、今はめいめいが連れて歸つてゆくのに、有った娘まで死なせて歸つてくるのが、悲しくてなりません。」と詠んで泣いているところなのであり、 また父親もその歌を聞いて、どんな思いがするだろうか、このように泣き悲しむことも、歌を詠むことも、

28) 姜泰國；前揭書

わざと、とってつけてできることではありますまいと悲みながら泣いている、ところでもある。

この個條について、松原輝實氏は

遊び或は風流の位相を既に遙かに放下してそれは肺汗をしぼり盡くす態より出づる眞率の情であり、「おもふことにたえざる」心内悲泣の表出であった」[29]

と述べている。 また、小西甚一氏も、

いつしように暮しておれば、子供はうるさくて厄介な存在だが、離れて眺めると、しみじみとした家庭の味ひが子供から湧きあがることを感じる、それは、いつの世もかわらぬ人の眞情である。そうして、いつの世もかはらぬ眞情こそ歌のいのちだとするところに、貫之晩年の表現精神があるトル[30]

と述べている。 だが、萩谷朴氏は、この日の個條について、もっとひろく深くみつめている。氏の見解を追ってみると、氏は、前後二つに分れていると言いながら、前半においては、渚の院にまつわる惟喬親王と在原業平の歌物語を素材として、そうした史蹟に臨んでの詠史と述懐の和歌の即境性に及んでいるが、 これは歌論的主題に属すると同時に、 貫之個人にとっては、 紀氏の過ぎし日々の榮光を懐しむ回顧的な氏族意識につながるものであり、 その氏族の歴史の下に今生を享けて存在する自分自身に對する反省自覺という、非常に緊張し、高揚した心境に到達する結果となったものである。 そうした詠史述懐の自意識あるいは自己反省から、當然、亡兒哀傷の自己反照的主題に構想が移ってゆくのであるが、そうした個人的な悲泣、詠歌の心境を、今度は、一般的、普遍的な詩歌發想論という高度の文藝理論に發展させ、さらに、それを國境、民族の垣根を越えた世界的な展望にまで擴大することによって、土佐日記における歌論的叙述を經驗させているのであると述べ[31]ている。

6．二月十六日[32]

けふのようさつかた、京へのぼるついでにみれば、……。夜になして京に入らんとおもへば、いそぎしもせぬほどに、つきいでぬ。かつらがは、つきのあかきにぞわたる。……。 いへにいたりて、かどにいるに、つきあかければ、いとよくありさまみゆ。……。

さて、いけめいてくぼまり、みづつけるところあり。 ほとりにまつもありき、いつとせむとせのうちに、千とせやすぎにけん、かたへはなくなりにけり。 いまおひたるぞまじれる、おほかたのみなあれにたれば、「あはれ。」とぞひとびといふ。 おもひでぬことなく、おもひこひしきがうちに、このいへにてうまれしをんなごのもろともにかへらねば、いかがはかなしき。 ふなびともみな、こたかりてののしる。

29）松原輝實；前掲書，p.94.
30）小西甚一；前掲書，p.187.
31）萩谷朴；前掲書，p.376.
32）木村正中；前掲書，p.104.

かかるうちに、なほかなしきにたへずして、ひそかにこころしれるひとといへりけるうた、

むまれしもかへらぬものをわがやどにこまつのあるをみるがかなしさとぞいへる。 なほあかずやあらん、またかくなん。 「みしひとのまつのちとせにみましかばとほくかなしきわかれせましや」

わすれがたく、くちをしきことおほかれどえつくさず、とまれかうまれ、とくやりてん。

貫之たち一行は京都にある自宅へ歸ってきた。 赴任先で金錢を送りながら留守番を賴んでおいたが、管理がよくできていない、池のまわりの松を眺めて、感慨無量な氣持になるのだが、この荒れ果てた中で、貫之の胸裡にかすめたのはやはり、一諸に歸れなかった亡き娘のことであった。

木村正中氏は、この個條について、ここに土佐日記全體を貫いてきた亡兒追憶の情を顧み、いまはその悲しみに靜かにひたりながら作者貫之が自らの心をしめやかに見つめているごとき自己觀照的な態度で、 二首の歌詠まれている。 と述べながら、 さらに、 「見し人の」の歌には、 その「遠く悲しきわかれ」に、土佐での死別と、人間一般の永遠の別れとが意味されており、人生無常の普遍的な感慨をこめて亡き娘への哀感が流れ、屬日の風情を越をに幽遠の思念が詠み込まれていると見られようと述べている[32]。

氏はまた、土佐日記の本質については、土佐日記の亡兒追慕の主題は、以上のごとく、 他のさまざまな主題的意義ははなはだ顯著であるにもかかわらず、それをもつて全體を律することはできない。他の主題的事項についても同樣であろう。 むしろ特定の主題にしばられることなく、さまざまな意識や發想が繼起的につながったり、表裏をなしたり、矛循したりしながら、總體として作品自體を貫之の複雜な內面像と化していくのが、「土佐日記」の本質と考えるべきなであろうと述 べている。[33]

深澤徹氏は、この個條に現われている「作者主體」性について、だいたい次のような見解を示している、つまり、荒れはてた我が家における娘の欠落に、故鄕喪失感的なものが集約的に具現されるのである。 〈旅〉の行程でのあれこれの出來事がここではむしろ鄕愁をさそう懷かしい日常へと變換し、それと對極に、今またよそよそしい風貌で立ち現われて來た都世界の非日常性が發見された時、書く行爲を通して疎外をくり返してきた〈作者主體〉は最はや、歸るべき己れの世界を見失つてしまうものである、が、日常と非日常との相互にわたりある〈媒介〉者として、いつかよるべき確固とした場を見失つてしまつた〈作者主體〉がおのれの作品世界を、この日記の末尾の一節で、みごとに解決つけていると言明している。[34]

この日記の大團円の終わりについて、小西甚一氏は、

老巨匠とその妻とが人の世より寒い月光のもと、荒れ庭に寂然と佇つところは、まことに名畵のような幕切れである、そうした冷えびえとしたなかに、ひとすぢ溫く流れるのは亡き子への涙であった。 涙は悲しい、しかし、その涙が、どれほど心を溫めてくれたことであろう。 「生まれしも… 」の歌は、その涙の珠のように滴たり落ちた秀作である。 すべてが破れ、去せていた庭に、唯ひとつ新しく生じた小松か

33) 上揭書、p.105.

34) 深澤徹"土佐日記一時空論"「日本文學」 (VOL 32), 日本文學協會編集, 1783, p.68.

ら、亡き娘へと回想が起くあたり、何かほのぼのとした温かみを感じる。「えつくさずとまれかうまれ、とく破りてむ」と餘情と羞らひをこめて閉じた邊も、女の筆らしい柔かみと優しさとを含めて、巧みな結末である。[35]

と激讃している。また、この「土佐日記」全篇を、作者自身の複雑な感情、たとへば、隣家同士の喧嘩などというどたばたの幕切れから救れたものは、やはり、亡き娘への思い出であったと、臼田甚五郎氏[36]は言いながら、貫之の調和的な世界観もさることながら、卑俗な感情を浄化してくれた最大、最高の因子は、亡き娘に對する追慕の至情であった。この子の思い出には、思い出が作用すべき餘計な何もなかったであろう、子供の世界には、罪もなければ、汚れもないからである、遠く悲しい別れに涙する思いの老夫妻の歌は、小松もともに泣いてくれたことであろうと、述べている。

以上、この末尾の個條について、いろいろな見解をうかがうことができる、だが、皆が異口同聲に、ほめたたえていることがわかるのである。

貫之は京を出てから、五年ぶりに自分の家に歸ってみると荒れ果てているのにあきれかえてしまったことから、察せられる如く、彼は、日常、社會批判的であった。人間一般の不信という念がよみがえたことはちろんである。池のほどりにあった老松もなかばなくなっているので、がっかりする。任地では幼いものが、おなじ間に、京では老いたものが、なくなっている。そこに無常さまで感じたのであろう。両方とも大事に、心の頼りにしていたものであるから、なおさらであったであろう。ところで、見しらない小松が、留守中に生えている。まるで、亡くした幼い娘と老松の還生の如くである、だが、それはしよせん小松にすぎなかった、またも、ここで生まれた女の子を土佐で亡くして、一諸に歸えられなかった悲しみが湧き上がってきたのである。心の中では、忘れてしまおう、いや忘れるものか、といろいろ考えながら、何んとか納得してみようと、つとめてみるが、それがなかなかできなかったのである。こういう矛循的なからくりから逃がれなかったのである。

こういうことから察すると、結局、貫之の自己反照は、人生の矛循というところに歸着していると思えるのである。生まれた娘もいない自分の家に小松を見出すのも矛循であり、忘貝を素材として、娘の思い出を忘れたくないといったのも矛循であると言えるのである。

何とか、統一的に解決しようとしても、貫之の胸中には、いつも、また思い出すためにときどき忘れてしまう方法がいい、と、心を慰めたところで、決して根本的に問題を解決したことにはならないと言えるのである。

忘れるのと忘れたくないとの問題は、永遠に並行する煩悩の二つの相に過ぎないと言える。貫之は自分の心の中の矛循をどことんまで追求してみたが、結局はよい結果を得られず、すべてを「えつくさず」という未解決のままに筆をたたき置いてしまったとしか考えられないのである。

35）小西甚一；前掲書，p.201.
36）田臼田甚五郎；前掲書，p.94.

だが、「土佐日記」には、三つの主題がある。 その中でも、自己反照の主題が、 いちばん最後まで存續したことが、やはり、紀貫之の創作意識の最も深部を占めたものが、自照性であったこと立證していると考えられるのである。

Ⅲ. 結　　論

貫之という日本古典文學の巨匠を前にして、その作品について、まお研究歴の淺い筆者がおそろおそろと、 土佐日記の第一ページをめくると、その冒頭の "男もすといふ……" 一文にとまどってしまった經驗をもっている。 そのために、まず內容云々する前に、その一文を解明しないと、一歩も進めない氣がして、解いているうちに、これはも簡單な問題ではなく、その一文でもって、一つの論文になってしまったことがある。

本稿は、やっと門が開らかれて、一歩入ったことになり、深くは入れなかったことになるのである。

主題の一つとしての自己反照的な面だけをとらえ、それを中心主題にして、考察してみたのである。 土佐日記の內容に現われている自照的な色彩を濃厚にしている日の個條を選り分けて、その中で共通的な內容のみを分析するという方法をとったのである。

それは、① 12 月27 日、② 1 月 11 日、③ 2 月 4 日、④ 2 月 9 日、⑤ 2 月 16 日の各個條にでている。 これらの外にも、自照的な內容がにじみ出ている個條もいくつか見えているけれど、それは "老境を嘆く述懷" と言える內容などで、それをも取り扱った場合、本稿が散慢に、あるいは平易になってしまうおそれがあるので、惜しみながらも、またの機會にと思って、思い切つて排除したのである。

というのは、同じ自照的主題であっても、筆者は、亡き娘の哀傷と結びつけて考察してみようと思ったからである。 そして、次のようにまとめてみたのである。

①主題としての自己反照と亡き娘の追慕の關係がいかに成立するか、それを定立させるために、先學の諸氏のご意見を謹聽するなどして、確かめて見たのである。

② 12 月 27 日の「あるものを……」の詩などから、貫之の愛娘死亡という體驗的事實を立證するような心情表白といえる自照性がにじみ出ていることがはっきりされた點を見たのである。

③ 1 月 11 日は、文學的エネルギーを亡娘追慕の自己反照のテーマを媒介にして、 父母の恩愛はこんなものであると、年少讀者に倫理教育的効果をも暗示している個條であると思われたのである。

④ 2 月 4 日は、砂浜の貝や小石から、亡娘の思い出へと展開している點から老巨の悲痛をかいまみる思いがするのである。 この個條はこういう心情を表明する自己反照的テーマの第三の山場となっているのである。

⑤ 2 月 9 日は、紀氏の浮沈を回顧し、今日の自分を反省しながら、自己反照的テーマに移り、紀氏の沒落を嘆くことを止揚して、もっと視野を擴大させていの點で、超越者たる姿が見える個條でもある。

⑥2月16日は、人間一般の永遠の別れにおける人生無常的な歌で、自分自身の心をしめやかに見つめているような自己反照的な態度を見せている。

これらから綜合して見た場合、自己反照的な色彩が濃くにじみ出ていることが明確になっていることから察すると、これらの個條は自己反照的主題であり、また、この主題が、亡娘の追慕の念と深くかかわっていると結論を得たのである。

國文抄錄

Tosanikl의 자기반조성(自己反照性)에 대해서
—亡兒(죽은애)을 追慕(그리워)하는 述懷를 中心으로—

姜 泰 國

土佐日記의 主題中 하나인 自己反照的인 面만을 포착하여 그것을 中心主題로 삼고 考察하여 보았다.

그리고, 土佐日記의 內容에 나타나고 있는 自照的인 色彩가 농후한 日記날자의 個條를 분리시켜 그 속에서 共通的인 內容만을 分析 考察하는 方法을 택했다.

日記의 날자個條를 분리시켜 考察하기에 앞서, 우선, 主題로서의 自己反照와 亡兒追慕와의 關係가 어떻게 成立되는가를 고찰하였다. 결과 相關關係가 깊게 맺어져 있음을 엿볼 수 있었다.

날자의 個條를 分離시키고 다음과 같이 고찰해 보았다.

① 12月 27日字 日記속에 나타난 詩句등을 통해, 作者의 귀여운 딸자식을 잃어버리는 안타까운 체험적인 事實을 立證하는 것과 같은 心情表白이라고도 말할 수 있는 自照性을 엿볼 수 있었다.

② 1月 11日字에서는 文學的 에너지를 亡兒追慕의 自己反照的 테마를 媒介로해서 父母의 愛情은 이런 것이라고 倫理敎育的 效果마저도 暗示해 있음을 알 수 있었다.

③ 2月 4日字는, 모래砂場의 조개껍질등을 보고 亡兒의 追憶으로 전개해가는 點등에서 老巨匠의 悲痛함을 느끼게 하고 있는데 이러한 心情을 表明하는 自己反照的 테마의 第三의 클라이막스로 되어 있다.

④ 2月 9日字는, 作者의 紀氏 家門의 浮沈을 回顧, 反省하면서 自己反照的 테마로 전개하여 視野를 擴大해가는 超越者적인 면모를 엿보이게 하고 있다.

⑤ 2月 16日字는 人間一般의 永遠한 離別에 있어서의 人生 無常的인 노래로서 自己自身의 마음을 차분하게 바라보는 것과 같은 自己反照的인 態度를 보여주고 있음을 알 수가 있었다.

이상의 일기의 날자個條에 나타난 內容으로 미루워 볼때 自己反照的 色彩가 농후하게 깔려 있음을 알 수 있다.

그러므로, 亡兒를 追慕하는 마음과 自己反照的 테마의 연관성이 속깊이 관계되어 있음을 고찰할 수가 있었다.